

# 研究ノート：日仏共同支配期ベトナムにおける 日本語教育の一側面 —日本プロパガンダ誌『Tân Á(新アジア)』の 日本語解説を中心に—

有 田 佳代子

## 1. はじめに

日本で学ぶベトナム人留学生数は、2017年時点で中国に次いで多い。2012年が4,373人、2014年が26,439人、2017年が61,671人という数字から、日本の高等教育機関、専門学校、日本語学校等で学ぶベトナム人学生の近年の急増ぶりがわかる<sup>1)</sup>。また、日本からの「技術移転」を目的とした技能実習生の在留資格で来日するベトナム人も急増している。2017年10月現在で23,271人と、2位の中国人15,058人を大きく引き離し圧倒的多数（全体の約半数）を占めている<sup>2)</sup>。彼らにとっても、一定の日本語習得が必要である。かつ、ベトナム国内にあっても日本語学習者数は64,863人と世界第8位の規模であり、日本語は高等教育機関や民間語学学校のみならず、2003年から中学校で、さらに2016年からは小学校において正規の外国語科目となった<sup>3)</sup>。このように、日本とベトナムの経済・文化交流の拡大を反映し、ベトナム人の日本語学習者・使用者は増加し続けている。

こうした状況下、ベトナム人への日本語教育方法論や教育リソース研究（松田2016、長野2017、井上2015等）はもとより、ベトナムにおける日本語教育状況についての研究（粟飯原他2018、ゲン・タイン・タム他2015、山本2017等）も近年盛んになってきた。

一方、このような現況の、その成り立ちの経緯や背景を知り今日の日本語教育や日越交流に生かすための、ベトナムにおける日本語教育史については、研究の十分な蓄積があるとはいいがたい。そのなかで、坪井（2017）は1945～1991年、つまり日本の降伏からベトナム戦争を経てドイモイ改革前の、日本との正式な国交がない時代における日本語教育について、日越双方の文献資料や当時の学習者へのインタビュー記録をもとに分析・考察した。この期間のベトナムにおける日本語教育史研究としては、管見の限り、嚆矢と言えるものである。

また、ベトナムにおける組織的日本語教育が行われたのは、坪井（2017）が示した1945年以降のことではない。第二次世界大戦期の、フランス植

民地であった1940年日本軍が進駐して以降の「日仏共同支配期」と呼ばれる時期、かなり大規模な日本語教育が仏領インドシナにおいて行われていた。だが、この時期のベトナムにおける日本語教育史については不明な点が多く、後述するように研究蓄積もごく限られている。

戦時期の海外における日本語（／「国語」）教育については、今日までに多くの研究が重ねられてきた。植民地となった台湾や朝鮮半島、占領地であった華北地域、軍政がひかれた他の東南アジア諸地域の戦時期日本語教育については、中村（2010）の指摘通り、豊かな研究が蓄積されている。しかし、こうした地域と比較するとき、仏領インドシナにはきわだった特色があり、それが日本語教育にも及んでいる可能性が指摘できる。すなわち、仏領インドシナは、アジア太平洋戦争開始後も西洋の宗主権を温存し続け、軍部の支配からは相対的に自立した外交活動、経済活動ができる場であった（白石他1978）。したがって、日本語普及についても、他の日本軍支配地域とは異なる独自性が認められるのではないかという点である。

そこで本稿では、日仏共同支配期ベトナムにおける日本語教育の一端を、当時ベトナムで出版された日本プロパガンダ誌『Tân Á（新しいアジア）』のなかに毎号見開きページで連載された日本語解説「ニッポン語の練習（Tiếng Nippon thực hành）」「ニッポン語（Tiếng Nippon）」、および読者の投書などを資料として示してみたい。まずは、「日仏共同支配期ベトナムにおける日本語教育」についての日本語による2つの先行研究を参照しながら、当時の日本語教育状況を概観する。次に、1941年から1945年までベトナムにおいて発行された、ベトナム語による日本プロパガンダ誌『Tân Á（新しいアジア）』について説明する。そして、そのなかで連載された日本語解説と、それに対する読者からの「声」を紹介し、これまで明らかにされてこなかった当時の誌面上の日本語教授、およびそれを用いて学ぼうとしたベトナム人学習者の状況の一端を示したい。したがって、本稿では「資料の批判的な検討をとおして現在の日本語教育への示唆」（古屋他2018）を今後と課題としつつ、今回の目的は「資料にもとづく歴史的現実の探求」としての新資料の検討である。

## 2. 日仏共同支配期ベトナムにおける日本語教育概況

ベトナムは、1887年フランス領インドシナ連邦としてカンボジア（のちにラオスも）とともにフランスの支配地となった。そして、フランスからの独立を目指す民族運動指導者ファン・ボイ・チャウが横浜に上陸し、独立運動への支援を日本に期待し、ベトナム人青年を日本で学ばせようと

する東遊運動（ドンズー運動）を始めたのは、1905年のことだった。日露戦争後にベトナム独立運動への支援の意図を明確にしない日本に対して失望し、離日する1909年まで、漢語ができるファン・ボイ・チャウは日本人とは筆談したというから、チャウ自身の日本語習得意欲は高くなかったようだ（白石2012）。東遊運動によって200名あまりのベトナム人青年が来日したが、この時期のベトナム本土での組織的な日本語教育は確認できない。

ベトナムでの本格的な日本語教育が行われるのは、第二次大戦中の1940年6月に北部仏印に、翌41年7月に南部コーチシナに日本軍が進駐したことによって、ベトナムにおける日本語使用の需要が高まったためである。この時期の日本語教育の全体状況については、いずれも主として日本側の史料を用いて考察した2つの論考、宮原（2004、以下「宮原論文」）とヴォ・ミン・ヴ（2010、以下「ヴ論文」）によってある程度明らかにされている。本稿の主たる議論に先立って、本節ではこれらの先行研究とそこで用いられた史料を再びたどることで、日仏共同支配期ベトナムの日本語教育の概要をつかみたい。その史料とは、戦時下の文部省内に設置された日本語教育振興会によって1941年7月から1945年1月まで発行された月刊誌『日本語』のなかの論考、南方情勢を伝える新聞記事、アジア歴史資料センター（JACAR）所蔵の防衛省防衛研究所・外務省外交史料館史料が主なものである。

## 2.1 日本語教育実施の背景および日仏の施策

1940年9月に日本軍が「仏印進駐」した目的は、援蒋ルート、すなわち蒋介石政権への英米による援助物資がベトナム北部を経由して中国に輸送されることを阻止すること、および日本軍のための軍事物資と食糧供給を確保するためだった。その日本軍の仏印進駐後に日本語需要が高まったのだが、宮原論文ではベトナム人にとっての3つの日本語学習動機を指摘している。①日本兵士との商売上の必要、②日本の進出企業への就職や勤務上の必要、③仏印政府官吏の実務処理上の必要、である。

日本側による組織的な日本語教育は、ハノイ大使館から外務大臣あて電報によれば、1942年3月ごろに始まったとみられる。翌1943年4月には北部仏印に日本文化を紹介する一元的組織として、北部仏印日本語普及会がハノイに設置された。ハイフォン、フエにも支部が置かれ、北部仏印における日本語学校経営、教員指導、資料配布など日本語普及事業を行っていた。また、南部仏印での組織的な日本語教育は、1942年4月サイゴン・

チョロン地区で日本軍宣伝部によってはじめられた。その後、日本語学校数が増加し、1943年4月には南部仏印日本語普及会が組織された。サイゴンに本部、チョロンとプノンペンに支部が置かれ、各日本語学校間の連絡、教員指導、資料作成配布などを行った。

一方で仏印当局、すなわちフランス政庁側も日本語教育を行っていた。1939（昭和14）年、在ハノイ鈴木六郎総領事から有田八郎外務大臣あての電報で次のように伝えられており、フランス人およびベトナム人の仏印政庁官吏や軍関係者に日本語習得を急がせていたようだ。「土語紙中北新聞ノ報ズル所ニ依レバ最近総督令發布セラレ地方各官庁ヨリ各一人ノ土人書記ヲ河内ニ派シ日本語ヲ習得セシムルコトトナリタルガ右習得希望者ハ漢字ノ素養アルコトヲ要シ講習期間ハ三カ月ニシテ會話、讀書ヲ習得シタルモノニハ一定ノ加俸を給與セラルルコトトナリ居レリト云ウ」<sup>4)</sup>。

## 2.2 日本語教育の具体的状況

この時期のベトナムでの日本語教育の実態については、宮原論文もヴ論文もともに雑誌『日本語』に日本語教育振興会理事である関野房夫が執筆した論考（関野1943）や仏印日本文化会館勤務の小関（1942）、蘆原（1942）の論考を中心に、その概要を述べている。1943年時点で、ハノイでは小学校や中学校を借り、週3回、一日1時間程度、1期が3カ月間で、1年（3期）で終了する講習会が行われた。受講者は1000人あまりであったという。仏印政庁による政庁内、インドシナ大学内での日本語講座も行われた。また、インドシナ大学入学資格試験選択科目の中に、日本語が加えられた。ハイフォンでも、270人ほどが学ぶ講習会のほか、華僑中学では正規科目で週10時間の日本語教授があった。サイゴンでは、共栄日語学院、西貢日本語学校、南洋学院付属日本語学校など7つの日本語学校・講習会があり、900人あまりの学習者がいた。授業時間数は、週2～12時間とバラバラである。

教材については、外務省も大使府も困惑したと伝えられている。ベトナム語はもとよりフランス語版でも日本語教科書がないから、それができるまではフランスで使われている日本語自習書を使うように、という電報が外務大臣から送られている（1942（昭和17）年5月29日）<sup>5)</sup>。しかし、その後は、国際学友会『日本語教科書』、大出正篤『効果的速成式標準日本語読本』、日本語教育振興会『ハナシコトバ』・『日本語読本』・『日本文化読本』、台湾で出版された『簡易国語読本』などが使われたという。また、雑誌『日本語』には言及がなく、したがって宮原論文にもヴ論文にも言

及がないが、南部仏印日本語普及会によって出版された『GRAMMAIRE JAPONAISE』（出版年は不明。しかし、南部仏印日本語普及会が存在した時期は1943～1945なので、その時期に限られる）が存在する。T.Sokawaという日本人らしき、CHASSELOUP - LAUBAI 高校の日本語コース教授によって執筆されたフランス語による日本語文法書である。この書籍もこの時期の、特に南部ベトナムにおいて使われたであろう。

そして、小関（1944）によれば、「高級者に対するクラス」がないことが現場の悩みだったという。これは、教師不足の問題があった。当初は日本語教師としての専門教育を受けた人材はおらず、他の職業を持つ在留日本人がボランティア的に教えていたようだ。1940年代はじめに東京外国語大学でフランス語を学び、ベトナムに留学した大橋与成が体験をもとに著した小説『仏領印度支那にさ迷う』（大橋 2000）に、留学生である主人公が陸軍情報部中尉に頼まれていやいや日本語教師となる場面が描かれている。日本国内では軍部の要請で1942年11月に南方派遣日本語教育要員養成所が文部省により設立されたが、講習会修了者が派遣されたのはフィリピン、ジャワ、ビルマ、マラヤなどであり、占領地ではない仏印は含まれていなかった<sup>6)</sup>。したがって、日本大使府が主催する日本語講習会では講師不足のため、後述する通り、ハノイの日本大使府は、台湾総督府の書記を講師としてハノイに派遣することを求めている。

### 3. 日本プロパガンダ誌『Tân Á (新アジア)』について

この時期、日本大使府情報班によって刊行された隔週刊雑誌『Tân Á』は、日本側にとっては貴重な「宣伝」媒体だったといえよう。筆者は未見だが、Vu (2017) によれば、創刊2年記念第45号の「はじめに」には、この雑誌が「ベトナム人に日本文化と技術を正しく伝え、東洋の文化と権利を享受できるように指導するもの」「日本とともに東アジアの建設に取り組む読者に向けたもの」「共栄圏とともに誕生・発展するもの」とある。また、筆者が入手したなかでは、日本敗戦間際の1945年8月10日付第72号のかなり長い巻頭言に、「日本人は道義の民族だ。日本がその理想に沿って強く歩くとき、そこには一つも誤りがなく、すべて道義の実現となる。もし諸君が日本と協力した結果について疑義があるなら、それは道理に反している。諸君が自分の手で白人種の攻撃から祖国を守るのなら、日本はただちにベトナムを諸君に返還する。諸君は日本と同様に、白人帝国の脅迫の前に立つ大東亜の一分子なのだ」（拙訳）ともあり、降伏間近にあって涙ぐましいような日本宣伝に尽力している。終始こうした語勢の

うち、1942年10月から1945年8月まで、毎号A4版で20ページほどに細かいベトナム語で書かれた雑誌が、72号発行されている<sup>7)</sup>。

Vu (2017) によれば、記事は同盟通信社から配信されたもののほか、日本人、台湾人によって執筆されベトナム語に翻訳されたものではないかという。小松清などの文化人も執筆している。また、Vu (2017) は、ベトナムの識字率が10%程度だった当時、ベトナム人ジャーナリスト Nguyễn Ký Nam が「ベトナム知識人が『Tân Á』を精読していた」という回想を伝えている<sup>8)</sup>。

## 4. 『Tân Á』の日本語解説ページについて

### 4.1 資料

グエン・バン・キム他 (2015) によれば、『Tân Á』が所蔵されているのは、ハノイの文学研究所の20冊と個人所有の10冊とされている。筆者は文学研究所で複写版の合冊製本を閲覧し、その複写を申請したのだが、すべてのページの複写は許されなかった。したがって、ここで『Tân Á』に掲載されたすべての日本語解説ページを検討することはできず、72号まで発行されているうちの20冊分の、そのうちの複写が許された部分のみであり、その他の部分については今後の資料収集の努力に委ねられる。

不詳ではあるものの、以下に入手した資料の発行年月日、号数、課、執筆者、主な内容を、発行された順に示す。不明のものは「×」、不確かなものは「？」を付した。

号数	年月日	タイトル及び課	執筆者	主な内容
×	1942.12. ××	tiếng Nippon thực hành (ニッポン語の練習) 第4課	S.Kawamura	数、助数詞、いくつ、何〜など。
新春	1943.2. ××	tiếng Nippon thực hành 第6課	Sigekazu Kawamura	動詞を3種類(五段、一段、規則無し)に分類。五段動詞と一段動詞の5つの活用表と「ます形」「て形」の意味説明。助詞「を」「に」
×	1943.3. ××	tiếng Nippon thực hành 第8課	S.Kawamura	サ変・カ変動詞の活用、です/でした、ます/ました、ません/ませんでした、～ましょう(未来・誘い)、～ていましょう(推量)、お～なさい/お～なさいますな(丁寧な命令)、～てください(依頼)

5 ?	1943.3.5	ニッポンゴ 第9課	S.Kawamura	動詞活用形それぞれの使い方、意味。連体形、連用形、未然形、意志形、仮定形、命令形。「する」動詞(勉強する、約束する)。助詞「と」(～と言います、窓を開けると)
×	1943.3. × ×	新執筆者 S.Kimura 挨拶  tiếng Nippon (ニッポン語) 第1課、第2課	S.Kimura	第1課: 動詞「ます形」の意味(現在の行動、習慣、未来)。第2課: 動詞を4分類(五段、上一段、下一段、その他)し、「その他」以外の動詞の辞書形から「ます形」の作り方の解説。
×	1943.4. × ×	第2課 続き 第3課	S.Kimura	第2課: 下一段動詞は「eru」、上一段動詞は「iru」で終わる。例外で「eru」「iru」で終わる五段動詞。「～の中に」「の上に」「の横に」「の前に」など。第3課: 否定 ます→ません
17	1943.4. × ×	第4課	S.Kimura	「～ています」の意味(現在進行、結果の継続)。否定「～ていません」。家族親族の呼び方(息子、娘、おばさん、おじさんなど)。
18	1943.5. × ×	第5課 第6課	S.Kimura	第5課: 動詞の過去形(ました/ていました/ませんでした)。「～たとき」(仏文法の半過去、大過去を参照)。第6課: 例外「くる/する」の活用。指示詞(これ/そこ/あの)
19	1943.5. × ×	第7課	S.Kimura	五段動詞「て形」「た形」の作り方(音便。ひらきて→ひらいて、とびて→とんで)
22	1943.9. × ×	第9課	S.Kimura	経験「～たことがあります」「～たことがありません」。
23	1943.10. × ×	第10課	S.Kimura	授受動詞(～てくれます/くれませんが/くれました/くれませんでした/くださいます/てもらいます/いただきます)
24	1943.11.5	第11課	S.Kimura	五段動詞の可能/尊敬/受け身(読めます、とべます、たたかれました、ことができませんでした、読まれます、お～になります)
25	1943.11.20	第11課(続き)	S.Kimura	下一段動詞の可能/尊敬/受け身(可能動詞として「食べられます」が短縮形)。

26	1943.12.8	第11課(続き)	S.Kimura	上一段動詞の可能/尊敬/受け身(可能動詞として「煮れます」が短縮形)。カ変・サ変動詞の可能/尊敬/受け身。
27	1943.12.20	第12課	S.Kimura	授受動詞の待遇表現。目上、目下と区別して使う(てくださいます、ていただきます、てくれます、てやります、など)。
28 ?	1943.12. × ×	第13課	S.Kimura	要求(～たいです、たくないです、たくありません)、理由「から」「ので」。「～に行く」「～に来る」
30	1944.2.25	第15課	S.Kimura	同時の動作「ながら」(寝ながら本を読む)、逆接「ながら」(笑いながら心で泣く)。
33	1944.3.25	第17課	S.Kimura	動詞「て形」を使った複文(うちへ帰って、本を読みます)を4種の動詞それぞれで説明。助詞「へ」「に」「で」の場所を表す使い方。
40 ?	1944.6. × ×	第24課	S.Kimura D.N.Anh	条件(雨が降れば、降ると、もし)、4種の動詞それぞれで説明、練習。
41 ?	1944.6. × × ?	第25課	S.Kimura D.N.Anh	複合動詞(～はじめる、～だす)、4種の動詞それぞれで説明、練習

## 4.2 2人の執筆者<sup>9)</sup>とその日本語解説ページの特徴

### 4.2.1 S.カワムラ (Sigekazu Kawamura)

1942年10月に創刊された当初から翌1943年3月5日号まで(隔週発刊で10～12号ほど)日本語解説「tiếng Nippon thực hành (ニッポン語の練習)」第1課～第9課を執筆したのは、S.Kawamura (Sigekazu Kawamura) という人物である。このカワムラという日本人らしき執筆者について、現状では詳細がわからない。ただ、1943年3月下旬号(日付不詳)で、次の執筆者であるS.Kimuraが新連載のあいさつ文で「カワムラ先生が不在となった今、『ニッポン語の練習』は中断するべきだ」と書いて新しい日本語解説を第1課から始めているため、何らかの理由で『Tân Á』への執筆、かわりを取りやめたようだ。

カワムラの日本語解説ページは、各課とも最初に訓令式ローマ字の進出単語とベトナム語訳があり、次に会話文(ローマ字の日本語とベトナム語訳)があり、最後に文法解説という流れになっている。新出単語部分には、Nikai、Kesiki、Hikōki、Sensōなどととともに、助詞「と」や「も」なども



ベトナム語訳とともに並んでいる。会話部分は、一つのまとまった談話になっている課も、それぞれがバラバラな発話である課もある。

また、動詞を現在の日本語教育と同様3種類（第1種動詞（*động từ loại thứ nhất*）＝五段、第2種動詞（*động từ loại thứ hai*）＝下一段と上一段、規則無し動詞（*động từ không theo quy tắc*）＝サ変とカ変）に分けた。そして、その活用形については、第1変体（*biến thể thứ nhất*）が辞書形、第2変体（*biến thể thứ nhì*）が連用形、第3が連用形音便（「て形」）、第4が未然形、第5が命令／仮定形となっている。入手した資料の限り、第6課で3種類の動詞とその5つの活用形をすべて紹介しているが、その意味や動詞活用の規則性については課が進むごとに順次説明しており、学習者の立場からはもどかしいような提示といえる。

#### 4.2.2 S. キムラ (S.Kimura)

カワムラを引き継いで執筆したのは、S.Kimura（キムラ）という人物だ。キムラは、『*Tân Á*』において日本語解説のみならず、上述した新連載のあいさつ文や巻頭言なども書いている。この人物について、『*Tân Á*』のなかでは確認できないが、1942（昭和17）年8月のハノイ大使府と東京の外務省とでやりとりされた電報（第198号、第199号、第742号）<sup>10)</sup>によると、ハノイからの要請により台湾総督府からサイゴン（チョロン地区）に日本語講師として派遣された木村繁雄書記ではないかと推測される。キムラは、前述した1943年3月の連載開始「あいさつ文」で「この半年間、わたしはサイゴンで初めて日本語を教えてきた」「日本語の文法や文章を学んできたが、実際のところ、日本語を教えることはわたしの正規の仕事ではない」（拙訳）と書いている。一方、電報200号は「本府ノ外郭団体タル共栄会<sup>11)</sup>ニオイテハ仏印派遣軍報道部ヨリノ要請ニ基ツキ客年十二月仏印提岸（引用者注：チョロン）ニ不取敢広東支部ヨリ職員ヲ派遣駐在セシメ主トシテ軍隊慰問ノ巡回映画ヲ行フト共ニ各支部発行ノ華文雑誌、図書、〔レコード〕等ノ販売配布等ヲ実施シ来ル處現地日本官憲ノ要望モアルヲ以テ近ク同地ニオイテ日語講習所ヲ開設経営致度ク尚之ガ為専任講師トシテ同会書記」を派遣するとある。つまり、台湾総督府の情報文化工作組織職員であった木村が、日本語講師不足のために仏印へ派遣されるのだが、そこでさらに文化工作プロパガンダ誌『*Tân Á*』で、キムラとして記事や日本語解説も執筆するようになったのではないかと考えられる。

前述した「あいさつ文」に、キムラの日本語解説「*tiếng Nippon*（ニッポン語）」の「教育方針」が述べられている。拙訳で要約すると以下のよ

うな内容だ。「日本語を教えたのは初めてだが、ベトナムの熱心な若者の意欲にこたえるために、この半年間日夜日本語学校で努力してきた。学生たちは、最初はどんどん学習が進むのだが、数週間後にその進歩が止まってしまう。それは、日本語の動詞が難しいためだ。学生たちの作文を読むのは楽しいが、彼らは動詞の活用を混乱している。だから、動詞の働きを整理した本が必要である。カワムラ先生が不在となり、わたしが『Tan Á』に日本語解説を書くことになったのは、このための運命だ。わたしはここで、日本語の動詞の語尾変化や補助動詞の一部をラディカルに整理して説明する。話すときに不要なものは調整し、わかりやすい例文を多く使う。その例文を覚えてほしい。難しい部分は手紙で聞いてほしい。喜んで答えます」。

ここにもあるように、キムラの「ニッポン語」は動詞解説が主要な内容となっている。各課とも、まずはその課で学ぶべき動詞の形（「否定法」、「過去」、「現在形の2つ目：食べています」、「食べたことがあります：経験」、「可能・尊敬・受動」などだが、いまひとつ統一感はない）が示され、次に文法解説と例文およびベトナム語訳があり、その後に出新単語とベトナム語訳、最後に数問の練習問題が付いている。

上述した通り、キムラは動詞を4種類に分けている。まず、第1課で3種類を提示し、それぞれを第1種動詞 (Loại Thứ Nhất = 五段)、第2種動詞 (Loại Thứ Nhì = 下一段)、第3種動詞 (Loại Thứ Ba = 上一段) と呼んでいる。そして、第6課まで学んだところで、例外動詞 (động từ ngoại lệ) としてカ変動詞とサ変動詞を提出する。カワムラの執筆によるものを半年間学んできた読者としては、動詞の提示方法が違うため、ここで混乱したのではないか。また、第7課ではテーマ名が「音便 (Lê êm tai / euphone)」となっていて、そこでは動詞「て形」「た形」の作り方を説明している。連用形の語尾が「き」だったら「いて」「いた」(「咲きて」→「咲いて」)、「ぎ」<sup>12)</sup>なら「いで」「いだ」(「泳ぎて」→「泳いで」)、連用形語尾が「に」「び」「み」は「んで」「んだ」、連用形語尾が「ち」「い」「り」なら「って」「った」であるというように、例をあげて説明している。

例文は、「あいさつ文」でキムラが述べた通り、多くを提示している。「ねえさんは魚を煮ます」「マンゴーが落ちています」「お母さんが子どもの帰りを待っています」「女中がシャツを洗ってくれませんでした」「ビールをたくさん飲めば酔います」「あなたは宝くじでもうけたことがありますか」などというたわいのない日常的なものから、後半になると「あなたは国のために死ぬことができますか」「ソビエト軍の猛烈な攻撃はドイツ軍によっ

て退けられました」「敵の軍艦は日本の飛行機によって沈められました」「わたしたちは生命を国家のために捧げられます」などの危なげなもの、「わたしは敵を愛することができます」「日本が勝てばアジアが平和です」「日本は戦争をしたくなかったのですが、アジアのために武器を取りました」などプロパガンダ的、政治的例文が頻出する。

カワムラのころにはなかった「練習問題」は、多くの課の最後に付されている。それは、文中の動詞を見つけさせるもの、ベトナム語訳を求めるもの（「Nippon wa sensoo o si-nagara, Dai-tooa no kensetu o si-te-imasu」など）、日本語訳を求めるもの（「Người đàn bà ấy chưa bán bánh.」など）、自分のことを答えさせるもの（「Anata wa kesa nani o tabemasitaka」など）である。

## 5. 読者の声と回答

毎号に「読者の意見」というページがあるが、筆者が入手したもののうち日本語学習について読者から『Tân Á』の日本語解説に求めているのは次の2点にまとめられる。誌上の独学なので発音が難しい、ひらがな・かたかな・漢字を教えてほしい、というものだ。読者の意見の内容は、拙訳を要約し示した。

### 5.1 「発音が難しい」

1943年の5月か6月、ブノンペン在住 Seijo という学習者から「日本と日本語が大好きで本や『Tân Á』で日本語を学んでいるが、発音が難しいからサイゴンで学びたい。サイゴンには知り合いがいないので、よい学校を紹介してほしい」という内容の投書がある。それに対する回答として、具体的な学校名と住所を示している。そして、「すでに多くの日本語学校がサイゴンにある。どれも夜のクラスで、毎週数回の授業があり、3期制だ。寮はなく、学費は1か月5ドン。新学期は8月開始」と述べていて、関野（1943）などとの指摘とある程度符合している。

また、1943年7月10日付けの投書は、「隔週刊の『Tân Á』を心待ちにし、特に日本語学習ページに注目しているが、この言語はベトナム人にとっては新しすぎ、発音も難しい。サイゴンから離れて暮らし、日本人と接近するチャンスがない、情熱あふれるわたしたち読者は、本に従って日本語を勉強している。そして、考えれば考えるほど、わからなくなる。1941年から今まで多くの日本語学習書が出版されたが、発音は統一されておらず、時には互いに背反することを述べている。わたしたちのように先生が

いない者は、日本語が大好きで始めた勉強に嫌気がさしてしまう。しっかり教えてほしい」という内容だ。これに対する回答で、発音について解説している。まず、「Sha は古い書き方で Sya が新しい書き方。どちらも安南（ベトナム）語の Sa と同じように読む。しかし、フランス語のように舌を後ろに曲げすぎず、舌は上の歯茎に近づけて曲げる」として、ローマ字のヘボン式は古く、訓令式が新しいと述べ、またフランス語との異同を指摘して指導している<sup>13)</sup>。長音については、「ā」「ī」「ū」などは通常の文字よりも長く読む、とローマ字の長音記号を説明している。そして、「Ei は ē と長く読み、Ii も分けずに長く読む」とあり、「Tokei (時計)」「Kawaii (かわいい)」などの長母音について説明している。また、撥音「ん」については、「an in un en on の n は少し息を止めて読む。bpm の前の n は、am im em と読む。たとえば、simbun (新聞)、sam-pun (3分) などだ」と説明している。そして、「ya yo yu は安南語の da do du と同様」と言っているが、これは南部方言を基準としており、北部の読者には混乱をもたらしたであろうと思われる。「日本語の wa は、oa を素早く読む。これは半母音だからだ。Wo は ō と発音する」と助詞「は」と「を」の発音を説明するが、実際には「wo」はほとんど用いられず、例文のなかの格助詞も「o」と表記されている。

## 5.2 「ひらがな・カタカナ・漢字を教えてください」

1943年7月1日付の投書では「キムラ先生の日本語解説を歓迎するが、欠点はローマ字だけで書いてあることだ。漢字や仮名を使って書いてほしい」とある。また、1943年9月20日付投書は、次のように熱烈だ。『Tân Á』はわたしたちに新しい思想と精神をもたらす。キムラ先生にも感謝している。わたしたちは日本文化が大好きだが、本や雑誌で日本語を学ぶことは難しく、学びへの渇きが強く唇を噛む思いだ。わたしたちサイゴンの学生は日本の代表団に心から要求したい。日本の壮麗な3つの文字を学びたい。1943年4月16日付のものでは、「もし大東亜の共通の繁栄と建設事業にベトナム人を参加させるなら、日本語を学ぶこと、漢字や仮名など日本の文字を実際に使えなければならない。私の意見を聞き、実行してほしい」と述べている。

こうした、一部読者の文字学習への意欲に対して、編集部からは最初のうちは「漢字や仮名を教える予定だ。もう少し待ってほしい」、「がっかりしないで学習を続けてほしい」、「非常に大切な問題が解決できない」、「技術的な困難がある」など、不明瞭な回答をしていた。しかし、第23号で「ひ

らがな・カタカナ・漢字を印刷する技術が現段階ではない、しかし、日本人はベトナム人に3つ文字を喜んで教えた」と回答している。

## 6. 考察—長沼直兄（1945）『First Lesson In Nippongo(FLN)』との比較を中心に

本節では、『Tân Á』での日本語解説連載と同時期に、日本の英字週刊誌『Japan Times Weekly』に長沼直兄（1894-1973）によって執筆・連載された日本語解説をもとに、大きな変更なくまとめられ、1945年2月に出版された『FLN』との比較を中心に考えてみたい<sup>14)</sup>。

『FLN』が、「今日の日本語教科書の文法シラバスとほとんど差のないレベル」（関1997）に達していたと評されていること、そして、著者である長沼は「20世紀の英語教育におけるもっとも傑出した人物のひとり」（有田2009）ともされるハロルド・パーマーからじきじき教えられ影響を受け、文部省という中枢にいて当時の日本の日本語教育界をけん引する人物であったことは、『Tân Á』の日本語解説執筆者カウムラやキムラとは異なる点である。一方で、『Japan Times Weekly』（1943年1月から誌名が『Nippon Times Weekly』に変更）は、河路（2010）によれば「英語の使い手に日本の立場や主張を伝える使命」を持ち、「戦争中は英語による日本宣伝誌という性格を色濃く帯びていた」（河路2010,p117）という点で、ベトナムにおける日本プロパガンダ誌『Tân Á』と同様である。また、誌面での、媒介語による日本語解説・教授という点も同様であり、比較の対象として一定の意味があると考えた。

### 6.1 発音指導と動詞の提出に関する『Tân Á』のわかりにくさ

長沼の『FLN』と比較して『Tân Á』について思うことは、端的に、「わかりにくさ」である。『FLN』が全章見られるのに対し、『Tân Á』は一部分しか見られないという点を差し引いても、モチベーションを維持した学習の継続、それによる日本語習得の成功を生みださないだろうと予想させるような、「説明の要領の悪さ」「読者への不親切」である。

たとえば、『Tân Á』読者から指摘される「発音」について、『FLN』では、第1課「発音 Pronunciation」という項目に短母音と子音が、第3課に長母音が解説されている。さらに、第12課では五十音図とともに、ローマ字のヘボン式と訓令式の違いについて、長沼はていねいに説明している。一方で、『Tân Á』では、未入手のカウムラによる第1課～第3課までに発音について言及されている可能性はあるが、「カウムラ先生が不在となっ

た今、これまでのクラスを中断し、あらためて始めよう」と意気込んだ第2の執筆者キムラの解説には、母音や子音の説明、五十音図による音節指導はない。読者による投稿に促されるように、本文ではなく、読者への解答という形で「読者の意見」欄に解説してある(5.1参照)のみだ。

次に、2番目の執筆者キムラが「学生たちの進歩が止まってしまう」理由として挙げた動詞の提出に関して、『FLN』と比較するとき、その説明の要領の悪さが際立ってしまう。『FLN』では、キムラのように最初からではなく、第5課まで動詞解説をしない。第5課で五段動詞(長沼はYodan Verbsと呼ぶ)の連用形が、第6課で一段動詞(Itidan Verbs)の連用形が練習とともに解説される。そして、その第6課でRegular Verbsとして、五段動詞と一段動詞の2つのグループがあること、一段動詞の辞書形はiruかeruで終わるが、例外もあること、それは「入る、要る、帰る、切る、参る、知る」がよく使うものだ、という説明がある。かつ、2つのグループの動詞は、連用形(「ます形」)以外の接続方法で大きな違いがあるが、それは今後解説するとある。そして、第7課でIrregular Verbsとして、カ変・サ変動詞が提出される。

一方で『Tan Á』では、上述したように最初の執筆者カワムラは、動詞を現行の日本語教育と同様の3種類(五段、一段、例外)としているが、それを引き継いだキムラは4種類(五段、下一段、上一段、例外)としているから、読者は混乱しただろう。そして、カワムラは、活用形については、辞書形を変体1、連用形を変体2、連用形音便(「て形」)を変体3、未然形を変体4、仮定形・命令形を変体5と呼び、それを表にして一度に提示してしまう(第6課)のだが、そこで解説されるのは変体2と変体3だけだ。変体2連用形(「ます形」)は「通常の動作、習慣、肯定」の意だとして、否定文を作るときは「ます」を「ません」に変えるのだと説明がある。変体3「て形」には、「います」を付けると現在進行形になり、否定文を作るときには「いません」になると説明する。そして、おそらく2か月後に発行された号の第9課で、他の活用形の意味や使い方を説明している。

また、就任当初のあいさつで「日本語の動詞の語尾変化や補助動詞の一部をラディカルに整理して説明する」と宣言した2人目の執筆者キムラによる動詞の提示も、カワムラと同様、わかりやすいとは言えない。たとえば、第2課で「第1種動詞」「第2種動詞」「第3種動詞」として、五段動詞、下一段動詞、上一段動詞が紹介される。ここで第1種動詞(五段動詞)については説明されず、第2種動詞(下一段)がeruで終わる動詞、第3種動詞(上一段)がiruで終わる動詞だという。しかし、そこには例外があ

り、「帰る、蹴る、照る、練る、眠る、減る」は eru で終わる<sup>15)</sup> が第2種動詞ではなくて、第1種動詞（五段活用）だとする。同様に、「煎る、入る、限る、切る、知る、散る、ののしる」は iru で終わるが、第3種動詞ではなく、第1種動詞だという。『FLN』で長沼が「入る、要る、帰る、切る、参る、知る」の6つの動詞を例外として絞ったのに対し、キムラは13個の例外を示している。理解語彙と使用語彙の区別を長沼が意識していたかどうかはわからないが、いずれにせよ、初級の学習者にとり、どちらがわかりやすいか、どちらが学習しやすさを印象付けるかは、言を俟たない。

## 6.2 練習方法の不明瞭

『FLN』の各課冒頭には、Substitution Table（置換表、代入表）という、左右に分かれたふたつの枠がある。たとえば第5課の場合、左には Kaki-, Kashi-, Isogi-, Yomi-, Tori- の5つの文字列があり、右枠には -mas', -masen, -mash'ta, -masen desh'ta, -masyō ka? の5つの文字列が並ぶ。この枠の下に、この左右の5つを組み合わせた25の文が左側に、その英訳が右側に並んでいる。第1課のはじめには、「勉強の方法」として、この Substitution Table を使った練習方法は次のように説明されている。①英語と比べながら日本語を読む、②英語を見ないで日本語を読む、③全部の文がわかるまで、順番を変えたり前後を行ったり来たりしながら何度も日本語を読む、④右側の英文だけを見て、日本語を言ってみる。こうした方法で、意欲があればひとりでも日本語の口頭訓練をテンポよく行えるようなテキストになっている。

一方、『Tân Á』の場合、キムラの「あいさつ」のなかに「毎日復習しなさい」「例文を覚えなさい」という指示はあるものの、各課のなかでの具体的な練習方法は明示がない。キムラによる各課の最後にある日越語翻訳を要求するなどの練習問題が数問出ているのみで、それが省略されている課もある。入手したものに限りカワムラの執筆分には、「ニッポン語の練習」と題されているにも変わらず、練習問題は見当たらない。

## 6.3 例文のなかの「政治」

河路（2010）によれば、『FLN』のもととなった『Japan Times Weekly』の長沼による連載の第1回目（1942年9月17日号）に、「FOR THOSE WHO WANT TO LEARN JAPANESE（日本語を学びたい人のために）」と題された解説がある。そこには、「共栄圏には共通語が必要で、日本語がその役割を負うべきであること、現に共栄圏の様々な地域か

ら、熱心に日本語が学ばれているとの報告があること、対米英戦の前までは、それらの地域で英語がほとんど共通語として使われていたが、今は日本語がそれに変わりつつあること、従って、『日本語の知識をもつものに与えられる利点は、疑いの余地の全くないほど明白である』こと」（河路2010, p117）とあるという。こうして最初の「あいさつ」で、「大東亜共栄圏の共通語」としての日本語について述べられているものの、その後の本文の例文などには、政治的なプロパガンダとなるような文言は出現しない。河路も、「最初の解説にこそ見られた戦時期の思潮の影響は、このあと連載されるテキストの中には見られない」、「使われる単語、文型は基本的なものに限られているため、特に時事的な傾向を帯びた語や文が登場する余地はない」（河路2010,p118）と指摘している。

それに比較したとき、『Tân Á』での日本語解説の例文には、上述した通りに勇ましいようなプロパガンダ的例文が頻出する。『Tân Á』も、また『Japan Times Weekly』（掲載時は『Nippon Times Weekly』）も、ともに戦時中の外国語による日本宣伝誌であったにもかかわらず。

## 7. おわりに

長沼直兄という、「傑出した個人」（河路2010, p131）による『FLN』と比べた時、『Tân Á』の日本語解説には、カウムラやキムラの生真面目な努力が空回りしているような印象がある。そして、『Tân Á』しか日本語学習の方法がなかった人々が、その説明の不統一とわかりにくさのために、熟読しても日本語学習を放棄せざるを得ないようにやささを、現在の日本語教育を引き継ぐ筆者としては腹立たしさとともに連想する。しかし同時に、「これは時間の無駄だ」とさっさと日本語学習を捨ててしたたかに立ち去っていくような、割り切ったベトナム人が多かっただろうということも、『Tân Á』の日本語解説からは想像するのである。

この時期のベトナム、つまり、1940年9月から1945年3月までの日仏共同支配期、そして1945年3月9日の日本軍によるフランス植民地政権制圧（「仏印処理」）後から8月15日の日本敗戦までの時期、グエン・アイ・クオック（のちのホー・チ・ミン）に率いられたインドシナ共産党は、ベトナム民主共和国樹立を目指した統一戦線、ベトナム独立同盟（ベトミン）を設立していた。ベトミンは、国内的には、ベトナムの多数派キン族の独占物ではないベトナム、異なる文化的背景を持つ少数民族を包摂し協働し、共有の祖国を守るために「フランスと日本を打つベトナム国民」を構想していた。さらに国際的には、「東南アジア」という地域概念を用い、



自らのアイデンティティをこの地域の一員であるとする「地域国家」（古田 1995）として位置付けるといふ、今日的な構想を持っていた。

また、1944 年から 1945 年にかけての天候不順と日仏の植民地政策の不手際により、一説には 200 万人もの餓死者を生んだ大飢饉がベトナム北部を襲った。仏印処理後の日本軍は、連合軍のインドシナ上陸への準備だけに集中し、自らの搾取も一因となって招いたこの危機的な事態に対処する余裕はなかった。仏印処理後の 4 月に成立した親日派によるベトナム政府（チャン・チョン・キム政府）も、飢饉に対する有効な対処策を実施する実力を持たなかった。そこで、「糧倉を襲って食糧を奪い、人々に分配せよ」という食糧倉庫襲撃運動を行ったのがベトミンであり、その影響力はベトナム北部に拡大した。さらに、南部を含む都市部の親日派にも影響を与え、彼らにあっても「独立は他人から与えられるのではなく、自力で獲得すべきものだ」との認識を持つようになったという。こうした運動は、1945 年 8 月 15 日の日本敗戦 2 日後、8 月 17 日のベトミン総蜂起から始まるベトナム全土での大衆革命、8 月革命につながっていく（古田 1995：126-132）。

このようなベトナムの状況のなかでの『Tân Á』の日本語解説を見たとき、執筆者であるカワムラやキムラの涙ぐましいような努力とはうらはらに、ベトナム人からは日本語はあっさりと打ち捨てられたのではないかとの印象を持つ。未読のものが多く断定はできないが、管見の限り、読者投書欄に投稿されるもののなかに次第に日本語学習に関するものがなくなっていく。そして、キムラの「ニッポン語」も、おそらく 1944 年 6 月か 7 月に中断されている。これは初級項目が終わったためとも考えられるが、当初は歓迎された日本語解説が、そのわかりにくさ、解説の要領の悪さゆえに、そして日本という国そのものに対する実利的な魅力が減じたこともあいまって、読者から見放され掲載の意味がなくなってきたのではないかと想像できる。ベトナム国内での少数民族との協働、国外では先進的な地域主義を構想していたホー・チ・ミンをはじめとするベトミン派はもとより、日本の力を借りて独立しようとした親日派のナショナリストたちも、「これには付き合えない」と、日本語を軽々に捨て置いたのではないか。

本稿では、日仏共同支配期ベトナムにおける日本語教育の一端を、当時ベトナムで出版された日本プロパガンダ誌『Tân Á』で連載された日本語解説を資料として示してきた。それは、執筆者たちの努力にもかかわらず、学習熱心なベトナム人学習者の期待に沿うものではなかったと思われる。はなはだしい困難のなか英知を結集して民族独立に向かうベトナムにおい

て、非専門家の日本人知識人の「にわか勉強」によって教授された「むずかしい日本語」は、「無用のモノ」としてこの時期に打ち捨てられていく。

## 註

- 1) 日本学生支援機構 (JASSO) 外国人留学生在籍状況調査  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html)
- 2) 国際研修協力機構 (JITCO) 業務統計速報「JITCO 入国支援技能実習生」  
<https://www.jitco.or.jp/ja/jitco/statistics.html>
- 3) 英語、中国語、ロシア語、フランス語と同様に、公立初等・中等教育の正規科目となった。ただし、英語教育が圧倒的な割合を占めていて、日本語教育実施校はごく少数にとどまっている。(国際交流基金 2017 年度 日本語教育 国・地域別情報  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/vietnam.html>)
- 4) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04011408600、本邦国語関係雑件 第一巻 (I-1-3-0-11\_001) (外務省外交史料館)
- 5) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04011413000、本邦国語関係雑件／日本語学校関係 (I-1-3-0-11\_3) (外務省外交史料館)
- 6) 木村 (1991) によれば、東京一ツ橋での文部省南方派遣日本語教育要員養成所および小金井の国民錬成所で行われた養成講習ののち、「比島、ビルマ、ジャバ、馬來、ボルネオ」への派遣計画が立てられた。たとえばビルマ派遣日本語教員は、昭和 18 年 7 月から 20 年 1 月まで、190 名 (うち女性 6 名) が着任したという (木村 1991、p154)。この派遣については昭和 17 年 7 月の閣議で決定されたが、ここに仏印が含まれていないのは、この時点で仏印が日本軍の占領地ではなくフランスの宗主権と共存状態であったため、あからさまな日本語教育「強制」は不可能だと日本政府が考えたためではないかと考えられる。
- 7) Vu (2017) によると、創刊から終刊まで 69 冊となっているが、筆者が参照したもののうち 1945 年 8 月 10 日発刊第 72 号が存在する。
- 8) Vu (2017) によると、Hồi Ký 1925 - 1964 Nguyễn Kỳ Nam - Tập II p119 (グエン・キナム回想録第 2 巻) に述べられているという。筆者未見。
- 9) 第 24 課と第 25 課で D.N.Anh というベトナム人らしき人物も S.Kimura と連名で執筆している。この人物については、Vu (2017) によれば、日本大使府情報班で『Tân Á』誌の管理者をしていた Dang Ngoc Anh という日本語が堪能な人物であるらしい。たしかに、各号の奥付に「Le Gérant (管理者) : Dang Ngoc Anh」とある。『Tân Á』の多くの記事が日本人や台湾出身者による記事のベトナム語訳であり、したがっておそらく Kimura の「ニッポン語」でも翻訳を担当し、第 24 課と第 25 課では翻訳と同時に解説や構成なども担当したのではないかと考えられる。
- 10) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04011413000、本邦国語関係雑件／日本語学校関係 (I-1-3-0-11\_3) (外務省外交史料館)
- 11) 電報 199 号では、木村も「共栄会」所属とある。「共栄会」とは、山口他 (2010) によればその性格について不明な点も多いが、日本軍が 1932 年に廈門を占拠したのち文化・経済工作によって台湾と廈門を結び付けようとする機関、台湾総督府情報部が映画配給等のために組織している機関などとされ、戦時下のプロパガンダ組織、日本軍と関係の深い情報工作のための組織だった (山口他 2010 : 241)。

- <sup>12)</sup> ここで「ぎ」は「gi」とローマ字表記されているのだが、ベトナム語で「gi」は「ジー」と発音されるため、混乱をきたす説明である。
- <sup>13)</sup> 『Tân Á』では訓令式ローマ字を用いているが、たとえば本文中で述べた南部仏印日本語普及会『GRAMMAIRE JAPONAISE』はヘボン式を用いている。
- <sup>14)</sup> 長沼は、1942年9月から1943年10月まで『Japan Times Weekly』に「Elementary Japanese Course」を執筆・連載した。『FLN』はこの連載をもとにして執筆されている。河路（2010）によれば、雑誌掲載時と書籍になってからのものとの異なる部分は、いくつかの課が入れ替わっていること、ローマ字表記が無声子音を反映しない「masu」「desu」などからそれを反映した「mas'」「des'」などに変わっていることなどである。（河路 2010, pp7-8）
- <sup>15)</sup> 「眠る」は eru で終わる動詞ではないので、誤植と思われる。

### 参考文献：

- 蘆原英了（1944）「佛印に於ける日本語教育」日本語教育振興会『日本語』第4巻8号 pp10-11
- 有田佳代子（2009）「パーマーのオーラル・メソッド受容についての一考察：「実用」の語学教育をめぐる」『一橋大学留学生センター紀要』12号 pp27-39
- 粟飯原志宣／松波千春（2018）「ベトナムにおける日本語教育の現状と課題：高等教育の現場が抱える社会と文化の問題を事例として（特集 海外の高等教育機関における日本語教育の現状と課題：日本からは見えない文脈を検証する）」『早稲田日本語教育学』24号 pp71-80
- 井上正子（2015）「ベトナム人日本語学習者における発音に対する意識化への試み：一フィードバックの事例、無声化した「す」に着目して」『日本語教育方法研究会誌』22-1号 pp88-89
- 石橋恒喜他（1942）「南方建設と日本語普及 従軍記者座談会」日本語教育振興会『日本語』第2巻5号 pp86-104
- 大橋与成（2000）『仏領印度支那にさ迷う』鳥影社
- 河路由佳（2010）「長沼直兄（1945）『First Lessons in Nippongo』の成立と展開——長沼直兄の戦中・戦後——」『東京外国語大学論集』, 81号 pp113-132
- 關野房夫（1943）「泰國及佛印に於ける日本語教育の現況（一）」日本語教育振興会『日本語』第3巻号 pp51-72
- 木村宗男（1991）「戦時南方占領地における日本語教育」木村編『日本語と日本語教育』第15巻 pp145-159
- Kim Nguyen Van, Vo Minh Vu（2015）「第二次世界大戦期における越日関係についての研究動向及び史料状況－ベトナムを中心に－」白石昌也編『第二次世界大戦期のインドシナ・タイ、そして日本・フランスに関する研究蓄積と一次資料の概観－研究のさらなる進展を目指して』早稲田大学アジア太平洋研究センター pp323-361
- グエン・タイン・タム／グイエン・チ・ツオン・バン／マイ・ゲエン・ゴック（2015）「ベトナムにおける日本語教育と日本研究の動き」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』国際日本文化研究センター pp249-258
- 小関藤一郎（1944）「南部仏印に於ける日本語学校の問題」日本語教育振興会『日本語』第4巻8号 pp12-16

- 白石昌也・古田元夫 (1976) 「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策—その二つの特異性をめぐって—」『アジア研究』第23巻3号 pp1-37
- 白石昌也 (2012) 『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子：ファン・ボイ・チャウとクオン・デ』彩流社
- 関正昭 (1997) 「『日本語教育文法』の流れ——戦前・戦中・戦後初期——」『(財) 言語文化研究所日本語教育資料叢書 復刻シリーズ第1回 解説』 pp20-33
- SOKAWA, T. (1943-5?), *GRAMMAIRE JAPONAISE*, NANBU HUTUIN NIPPONGO HUKYUKAI
- 坪井珠里 (2017) 「社会主義国家ベトナムの日本語教育政策の変遷とその目的 (1945年～1991年)：外国語教育政策の史的展開に位置づけて」『日本語教育』168号 pp40-54
- 中村重穂 (2010) 「日本語教育史研究方法論の再検討のために・その3：「自虐」と「自尊」のはざままで」『北海道大学留学生センター紀要』14号 pp50-60
- 長野真澄 (2017) 「ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程：越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した読み上げ課題による検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』66号 pp165-173
- 長沼直兄 (1945) 『First Lessons in Nippongo』開拓社
- 古田元夫 (1995) 『ベトナムの世界史 中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会
- 古屋憲章・小畑美奈恵 (2018) 「NHK 番組アーカイブスを利用した日本語教育史研究の可能性—テレビは戦後の日本語教育をどのように表象してきたか—」日本語教育史研究会 2018年度研究発表会資料
- 松田真希子 (2016) 『ベトナム語母語話者のための日本語教育：ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案』ココ出版
- 宮原彬 (2004) 「日仏共同支配期のベトナムでの日本語教育：ベトナム日本語教育史のためのノート」『長崎大学留学生センター紀要』12号 pp41-57
- 山口 守、金子 明雄、紅野 謙介、三澤真美恵 (2010) 「東アジアにおける戦時・戦後プロバガンダー マルチ・アーカイブを利用した「日本・中国・台湾・韓国」の比較研究」『日本大学文理学部人文科学研究所活動報告 2010年』 pp227-242
- 山本公平 (2017) 「ベトナムにおける日本語学校の経営存続に関する一考察：ドンズー日本語学校を中心に」『広島経済大学経済研究論集』40号 (2・3) pp29-40
- ヴォ・ミン・ヴ (2010) 「日仏共同支配期のベトナムにおける日本語教育」ファン・ハイ・リン編『日本研究論文集 社会・文化史』ハノイ国家大学付属人文社会科学大学 pp103-115
- Tân Á, Tập chí Nhật - Nam, (1942-1945)*
- Vu, Vo Minh (2017) The Image of “Great East Asia Co-Prosperty Sphere” in “New Asia” Magazine -Shaping “Great East Asia Intimate Sphere” in Indochina, International Symposium Empire and the Others, UCLA, March 2017.